

転生王子は TENSEIOJIHA DARAKETAI
ダラけたい 22



朝比奈 和

Asahina Nagomu

エド

本名はエドモンド。
クロノア王国の第五王子で、
ひたむきな性格の頑張り屋。

シエナ先生

ステア王立学校の教師。
鉱石研究の第一人者。

ヴァン

本名はヴァンス。エドの従者で、
主の行動に振り回されがち。

フィルの友人たち

アリス



トーマ



レイ



ライラ



フィルの仲間たち

コクヨウ



ヒスイ



ホタル



コハク



テンガ



ザクロ



ルリ



ランドウ



カイル・グラバー

クールな美形少年。闇の
妖精に好かれる蝙蝠の獣人。

アラン

ルイスの従者。主思いだが、
堅物なところが玉に瑕。

ルイス

エルディア王国の第四王子。
努力家で文武両道。

フィル・グレスハート

いちのせはると
大学生・一瀬陽翔が転生した
本編の主人公。目立たずに
だらだら過ごすのが夢。



1

俺——フィル・グレスハートはグレスハート王国の第三王子。

ステア王国のステア王立学校中等部に通う学生だ。

楽しい夏休みも終わり、俺は中等部の三年生になった。

学校では王子という身分を隠し、鋤石屋こうせきやの息子フィル・テイラと名乗っている。

だから、学校に通う生徒の中で俺の素性を知っている人は、ごくわずか。

同級生で友人のカイル・グラバー、レイ・クライス、トーマ・ボリス、アリス・カルターニ、ライラ・トリスタン。

そして、中等部二年のミゼット・レーガン。高等部に在籍ざいせきしているライオネル・デュラント先輩と、ライン・マクベアー先輩だけ。

まだしばらくは、王子という肩書きかたがのないフィル・テイラ生活を楽しもうと思っている。

そんな俺も、この秋からはついに最高学年。

先輩方はほとんどが高等部に進学したから同じ学校の敷地内にはいるけど、それに甘えてしまっ

てはいけない。

同級生にも後輩にも、頼られる存在になるよう頑張らなければ。

そして、願わくはトラブルに巻き込まれることなく、平穏な一年が過ごせるといいなあ。

……なんて、学校に戻ってくるまでは、そう思っていたんだけどなあ。

三年生としての学校生活二日目の放課後。

俺はさっそく、ピンチに陥っていた。

今日はカイルが剣術クラブに参加するし、レイたちもそれぞれ用事があるということで、珍しく一人で寮まで帰ることになったんだよね。

いつも友人と一緒にいることが多いので、一人になるのは珍しいことだ。

早く帰ってホタルたち召喚獣と遊ぼうかなあ、なんてことを考えていた矢先、校舎を出たあたりで同級生のルイス・シュバリエとアラン・ドレイユに捕まった。

そして今、彼らに校舎裏へ連れてこられてしまったわけなのである。

何やら俺に話があるみたいなんだけど……。

なんだか、今の状況って不良に絡まれた時のシチュエーションに似ているよね。

とは言っても、彼らは別に不良ではない。

二人は俺より一つ年上の、十歳。

今年度から中等部三年に転入してきた、エルディア王国の留学生だ。

ルイスはそのエルディア王国の第四王子で、アランは彼の従者。

彼ら曰く、ルイスは文武両道で才能に溢れ、自国の同年代の中でトップに君臨していたらしい。

そこでルイスは更なる高みを目指し、自分と渡り合えるライバルを求め、この世界でトップクラスの名門校であるステア王立学校に転入してきたそうだ。

ここでも、頂点となるのが目標だという。

その考え自体は、向上心があつてとても素晴らしい。

俺も応援する。ただし、俺に実害が出なければけどね。

「僕に話があるってことだけど、なんの話？」

こんなところまで連れてくるってことは、人に聞かれたくない内容なのだろうか。

俺が答えを待っていると、ルイスは腰に両手をあて、少し胸を反らす。

「質問は一つ。お前が今年、なんの科目を選択するかを聞きたい」

……俺の選択科目？

意外と普通の質問に、俺は目を瞬かせた。

「僕が受講する選択科目を聞くだけなら、別に移動しなくても良かったのに」

内密な話でもあるのかと思ったら、選択科目の話とは。

ステアでは受講する授業を、一年ごとに選べる。

先生や授業内容が合わない、取得単位を増やしたい、もっと他に学びたい科目ができたなど。進級するタイミングで、生徒は自由に科目を変更できるのだ。

ただ、大抵は一、二年生で受講した選択科目を継続して履修する生徒が多い。

途中で授業を変えようとすると、授業についていけず単位を落とす危険性があるからね。

希望すれば補講を組むなどサポートしてくれるが、追いつくまで大変だもんなあ。

俺も一、二年生の時と変わらず、『鉱石学・剣術・調理・加工・薬学・商学・召喚学』の七つを選んだ。すでに選択希望も提出済みだ。

だから、科目を教えることはできるんだけど……。

「ここに連れてこなくても、さっきの場所でも良かったんじゃないの？」

そう繰り返した俺に、アランが眉根^{まね}を寄せる。

「俺たちがお前に声をかけると、カイル・グラバーやレイ・クライスが邪魔^{じゃま}をしてくるからだろうが」

カイルやレイは俺がトラブルに巻き込まれないように、いつも気をつけてくれている。

確かに、ルイスたちが声をかけてくると、それとなく間に入って話を切り上げてくれることが

多い。

特にルイスは出会って早々、俺をステア王立学校で張り合うライバルに指名してきたからなあ。

カイルたちも少し警戒しているのかも。

もしかして、こうして選択科目を聞いてきたのは、それ関係かな？

「ちなみに、どうして僕の選択科目を知りたいの？」

俺が尋ねると、ルイスはフンと鼻息を吐く^は。

「そんなの、ライバルとして競うために決まっている。同じ選択科目、同じ教師を選ばなければ、評価や点数に違いがでてしまうからな」

つまり、同じ授業を受けて、全てにおいて挑んでくるってこと？

理由を聞いて、俺はげんなりとする。

「なんで僕なのかなあ。僕より優秀な生徒はたくさんいるのに……」

確かに、必修と選択科目の総合点では俺がトップだけど、各科目に優秀な生徒はいる。ため息を吐く俺に、アランはムツと顔をしかめる。

「何が不満だ。ルイス様のライバルに選ばれるのは、とても光栄なことなんだぞ」

光栄に思えないからだよ。

俺は基本的に、『人は人で、自分は自分』という考え方。

授業の一環で誰かと競い合うことはあっても、積極的に人と争う気はないんだよね。

「別にステアのトップを目指すなら、個々の科目のトップの人と競えばいいんじゃないの？」
各科目で優秀な成績を取れば、自ずと総合トップになれる。

だが、俺の提案をルイスは首を横に振って却下した。

「お前は成績が優秀なだけではなく、周りの人々から尊敬されているようだからな。お前を倒してこそ、この学校の頂点に立てるといふものだろう」

そ、そうなのかな。

俺を倒したからといって、RPGみたいに人徳ポイントが上がらないと思うのだが……。
納得できないでいると、アランが俺に顔を寄せて睨む。

「とにかく、選択希望の提出期限が近いんだ。早く教えろ」

ステアは学校が始まって一週間くらいは必修科目の授業のみがあり、その間に選択希望を決めるんだよね。

まだ日があるとはいえ、カイルたちがいない今がチャンスだったことには間違いない。

ルイスたちにも選択の自由があるとは言え、教えていいものか。困ったなあ。

俺がポリポリと頬のあたりを掻いていると、突然茂みがガサガサと揺れ、「ちよつと待ったあ！」
と一人の少年が飛び出した。



「フィル師匠ししやうの選択科目なら、僕も聞きたいです！」

青みがかった銀髪の少年が、挙手しながらこちらに駆け寄る。

そして、彼に遅れて黒髪の少年も茂みから慌てた様子で出てくる。

「エド様、飛び出していかないって約束だったでしょう！」

な、なんでこの二人まで……。

青みがかった銀髪の少年はエドモンド・ノアール・クロノア。黒髪のほうはヴァンス・クレセント。

彼らは今年中等部に入學した、一年生だ。

クロノア王国からの留學生で、エドはクロノア王国の第五王子、ヴァンはその従者である。

今から半年くらい前、青みがかった銀髪の少年と黒髪の少年が人助けをして歩いている、という噂うわさがステアの近隣諸国で相次いで流れた。

その時に目撃されていた少年たちが、エドとヴァンだ。

俺やエドのような青みがかった銀髪はこの世界では珍しい髪色で、聖クリティア教会では神に愛されし者の証あかしとして珍重ちんちょうされている。

それもある、祖国ではエドは過剰に期待され、常に特別視されてきたのだそう。

彼はその期待に応えようと必死に努力をしていたものの、次第に重圧に押し潰されそうになり、

深く悩むようになっていた。

俺と友人たちは夏休み前に、偶然エドたちと出会ってその悩みを聞き、相談に乗ってあげたんだよね。

特に同じ髪色の俺の言葉はエドの心に響いたらしく、以来、俺を『フィル師匠』と呼んで慕したってくれている。

クロノアに一度帰国すると聞いていたが、この秋から国を離れて留學することにしたらしい。

まさか俺が在學しているからって、留學先にステア王立学校を選ぶとは思わなかったけど。

俺とエドが並んでいると、目立つんだよねえ。

髪色に加えて雰囲気似ているせいかな、兄弟だと勘違いする人もいるし。懐なつかれるのは嬉しいんだけど。

「エド、なんであんなところから……」

茂みに隠れていたからか、エドの頭や制服には葉っぱや小枝がついていた。

俺がそれを取ってあげると、エドは嬉しそうに笑う。

「フィル師匠と一緒に帰りたいなと思って捜していたんです！ そうしたら、この二人に連れて行かれるところを見かけて、もし絡まれているなら助けてあげないといけないと思って」

エドはそう言って、ルイスたちを睨む。

師匠である俺に不遜な態度を取るの、エドは二人のことが好きではないらしい。「すみません。かえって足手まといになるだけだとお止めしたんですけど……」

ヴァンは俺に深々と頭を下げる。

そんなヴァンに、エドはふくつと頬を膨らませた。

「フィル師匠は確かに僕よりお強いかもしれないが、それとこれとは別じゃないか」

エドは正義感が強いからなあ。見過ごせなかったのだろう。

ルイスはエドに向かって、フンと鼻を鳴らす。

「それで会話を盗み聞きして、俺の質問に便乗しようとしたわけだな？」

エドは一瞬ギクリと肩を揺らしたが、すぐにルイスを睨み返す。

「だって、あなたたちだけ教えてもらうなんてずるいでしょ」

「一年生が三年生と一緒に科目を選択しても、意味がないだろう」

呆れるルイスに、エドは首を横に振る。

「意味はないですよ。憧れの師匠に少しでも近づくため、必要なことです。授業でわからないところとか、科目のコツとか、担当教諭の方との付き合い方とか、フィル師匠に教えてもらうんです！」

そう言って、胸を張る。

「あのね、エド。コッなら教えてあげられるけど、授業の内容でわからないところがあったら先生に聞きなさい」

優しく諭すと、エドは元気に答えた。

「はい！ わかりました。フィル師匠！」

あまりにも返事が早い。

本当にわかつてるのか不安になる。

苦笑していると、ルイスがグツと俺に顔を寄せる。

「弟子に選択科目を教えるなら、俺にも教えられるよな」

正確に言うと、エドは弟子ではないのだが……。

師匠と呼ぶことを、許可しただけである。

あの時はエドが入学してくるなんて思っていなかったから、つい承諾しちゃったんだよね。

「ルイス、僕は彼に勉強のコツを教えるって言ったんだよ。まだ、選択科目を教えるとは言っていないんだけど」

体を反らしてルイスから距離を取りつつ、訂正を入れる。

エドはそれを聞いて、悲しげな声を出した。

「教えてくれないんですか？ 師匠……」

捨てられた子犬のように、目がうるうると潤^{うる}んでいる。
うう、その顔で見ないでよお。

「はあ……わかったよ」

俺はため息を吐いて、観念したのだった。

2

校舎裏に連れ出された件から数日後の、選択授業が開始される日。

もちろん、先日の宣言通り、ルイスとアランは俺と同じ選択科目を選んだ。

あのあと、ルイスやエドに科目を教えたことを友人たちに話したら、カイルは「やはり、フィル様を一人にするんじゃないかった」と頭を抱えていたつけ。

レイにも「理由をつけて、ルイスとアランには教えなきゃ良かったのに」と呆れられた。けれど、あの二人の様子じゃ何がなんでも突き止めるだろうって思ったんだよね。

俺が今年も同じ選択科目を受講することは、クラスメイトの何人かには話していたし。

彼らがクラスメイトたちに聞き込みをして迷惑をかけるよりは、自ら教えたほうがマシだと思っ

たのだ。

それに、ルイスと同じ授業を受講するとしても、俺のスタンスは変わらない。

俺は俺で、ルイスはルイス。

向こうが対抗心を燃やしてきても、俺は普通に授業を受けるだけだ。

一番初めの選択科目の授業は、シエナ・マイルズ先生の鉱石学だった。

皆でシエナ先生のところへ移動しながら、俺はルイスとアランをちらつと見る。

初^{しょ}っ端^ぽが鉱石学とは、ルイスたちも運がないなあ。

ステア王立学校には個性的な先生が多いけど、シエナ先生はその中でも群^{ぐん}を抜いている。

研究が何よりも大事で、生徒たちをぞんざいに扱っても気にしない人だ。

鉱石の知識はきちんと与えてくれるけど、ちょっと先生っぽくない。

まあ、教師を目指してここに来たのではなく、ステア王家に頼み込まれて一時的に教師になっっているから仕方ないんだけどね。

そんな性格に加えて、授業も厳^{きび}しいし、レポートも多いし、生徒に求める基準も高め。

鉱石学は単位を落としやすい科目だという噂が立って、受講する生徒はほとんどいない。

今年の受講生も、俺とカイルとレイとトーマ、ライラとアリス。そして、新たにルイスとアラン

を加えた八人だけだ。

ルイスたちにとって、なかなか大変な科目じゃないかと思う。

だけど、その大変さの先に、鉱石学の魅力があるんだ。

ルイスとアランには、ぜひ頑張ってもらいたいな。

そんなことを考えているうちに、鉱石学の教務担当室に到着した。

人数が少ない鉱石学は、この部屋で授業を行う。

「シエナ先生、三年生の鉱石学の授業です」

俺はそう呼びかけて、鉱石学教務担当室の扉をノックする。

……返事がない。

しばらく待って同様に声をかけたが、やはり返事はなかった。

もしかして、授業のこと忘れているのかな。

たまにあるんだよね、シエナ先生。

部屋の鍵は開いているようなので、俺は「失礼します」と断ってから扉を開ける。

その行動を見て、後ろにいたアランが止めに入った。

「おい、入室許可が下りてないのに、勝手に入っているのか？」

「あ……えっと、シエナ先生の授業ではよくあることなんだ。『授業日は必ずいるから、ノックし

て返事がなくても、鍵がかかっていないなら構わず入ってこい』って」

俺は苦笑しつつ説明して、部屋の中に入る。

部屋の最奥には大きな窓があつて、その手前にシエナ先生の机があつた。

机の上は、乱雑に積まれた本や書類、鉱石などで埋め尽くされている。

そこで、シエナ先生は熱心に書きものをしていて。

顔にかかるアッシュグレーの髪を邪魔そうにかき上げ、ミント味の葉巻をガジガジと噛んでいる。

あの葉巻は煙草ではなくて、噛んで清涼感を味わうミントガムみたいなものだ。

ただ、とても強力なミントが使われていて、噛むと舌が痺れるくらい辛い。

子供だけでなく大人でも敬遠するほどの刺激だが、研究者たちはよく眠気覚ましに使っているぞうだ。

シエナ先生の目元にクマができているから、寝ていないのかな？

俺たちが部屋に入ってきたことにも、まだ気がついていないみたい。

そんな彼女の様子に、ルイスとアランは戸惑っているようだ。

もしかして、二人はこれが初対面かな？

シエナ先生は入学式などの式典に出席しないし、この部屋から全然出ないもんね。初めましてがこれなら、驚くのも当然だ。

俺はそんな彼らに、小さく笑う。

「シエナ先生は鉱石の研究に没頭していると、いつもこんな感じなんだよ」

レイはルイスたちに向かって尋ねる。

「鉱石学の受講を取りやめるか？ 初日だったら、科目の変更も可能らしいけど？」

単位数が足りないかと留年になることもあるので、受講してみても自分には無理そうだと感じたら、初日に限り変更できる救済措置がある。

確かになあ。ルイスたちは転入生だし、もう少し単位を取りやすい授業にしたほうが本当はいいんだよ。

しかし、レイの挑発的な態度を受け、ルイスとアランはムツとした様子だ。

「やめるわけがないだろう」

「少し驚いただけだ」

その返事を聞いて、トーマは二人に部屋の隅に置いてあった折りたたみ式の簡易椅子を差し出した。

「じゃあ、これをどうぞ」

ルイスとアランは、困惑しつつ椅子を受け取る。

「……この椅子はなんだ？」

首を傾げるルイスたちに、アリスがさらに画板を渡しながら言う。

「ここは教室みたいに机と椅子がないから、この画板と簡易椅子を使うのよ」

「この画板と簡易椅子で、授業を受けるのか!?」

声を上げるアランに、ライラは大きく頷く。

「それでも、まだ改善されたほうなのよ。私たちが一年生の時は、絨毯を敷いた床にクッションを置いて座っていたんだから」

そう、それもアリスが先生からクッションの使用許可を得なかったら、危うく冷たい石の床に座らされる場所だったんだよね。

その後、簡易椅子を持ち込んだり、画板を持ち込んだりして今の状態になったのである。

「鉱石学の教室もあるんだから、移動して授業すればいいじゃないか」

ルイスが疑問を抱くのも当然だろう。

すると、ようやく俺たちの存在に気がついたのか、シエナ先生がミントの葉巻をゴミ箱に捨て、口を開いた。

「どうせ少人数なんだ。ここで十分だろう。広い教室に移り、声を張って授業をしたくない。それに、移動にかかる時間の分、私の研究時間が減るしな」

鉱石学の教室は教務担当室のすぐ横なんだから、移動時間もちよつとだと思っただけだが……。

つまりは、それさえも嫌ってことだね。

シエナ先生は凝り固まった体を伸ばして、大きく息を吐く。

「そうか、もう授業の時間か……」

口調から、面倒臭そうなのが伝わる。

俺はそんな彼女に、にっこりと笑いかける。

「今年一年、またよろしくお願いいたします」

俺に続いて、カイルとレイとトーマとライラとアリスが「よろしく願います」と挨拶をした。

「ああ、よろしく」

シエナ先生はゆるく頷き、それから大きな欠伸をする。

「没頭されていたようですが、論文発表が近いんですか？」

アリスが聞くと、首をコキコキと鳴らしながら否定する。

「いや、お前たちに仕入れてもらった鉱石について考えていたら、夢中になってしまってた」

俺たちはこの夏休み、シエナ先生からお使いを頼まれ、ティリア王国で行われていた鉱石市に行った。

そこでシエナ先生のために、火属性と風属性が混ざった混合鉱石や、光の鉱石、反響の鉱石や腐蝕の鉱石といった特殊鉱石を仕入れたのだ。

どれも珍しい鉱石だったようで、シエナ先生も大変満足してくれた。

わかるなあ。新しい鉱石を手に入れたら、研究したくなっちゃうよね。

俺も反響と腐蝕の鉱石を手に入れたあと、すぐ実験してみたもん。

「あの特殊鉱石、面白いですね。僕も夏休み中に、いろいろ試してみました。ただ、活用方法に關しては、まだ模索中なんですけど……」

俺の言葉に、シエナ先生は共感を示す。

「ああ、そうだな。私も反響と腐蝕の鉱石は、とても興味深いと思っている。能力の幅は広そうなんだがなあ」

シエナ先生は腕組みして、「ふーむ」と考え込む。

「フィル。ちなみに、効果を試した時の結果は記録してあるか？」

「どんな発動でどんな結果になったか、メモは残してあります」

そう答えると、気だるげだったシエナ先生の目が輝く。

「それは、今持っているのか？」

俺は「はい」と頷いて、ノートに挟んであった、五枚つづりの紙を差し出した。

「授業が終わったら、シエナ先生に渡そうと思っていたんです」

シエナ先生はそれを受け取ると、嬉しそうに口角を上げる。

「この実験結果を元に、私のほうでも考察してみよう。何か新しいことがわかったら伝える」それは、とても助かる。

「ありがとうございます。よろしくお願いします！」

「良かったわね。ファイル」

微笑^{ほほえ}むアリスに、俺は首肯^{しゅくごう}する。

すると、俺たちの会話を聞いていたアランが、手を挙げた。

「あの……先生、鉱石学の授業はいつ始まるのですか？」

いつまでも授業が始まらないので、我慢^{がまん}できなくなったらしい。

シエナ先生は「ん？」と、アランたちに視線を移す。

「……ああ、そういえば、今年は受講者が二人増えたとか言っていたな」

もしかして、今初めてルイスたちの存在に気がついた？

先ほど、ルイスの疑問に答えていたように感じたが、相手が誰なのかわかったうえで話していたわけではなかったのか。

シエナ先生は俺たち全員に椅子に座るよう手で合図し、着席したルイスとアランの前に立つ。

「それで、お前たちの名前は？」

素っ気^{そけ}ない言い方をされた二人は、そんな対応に慣れていないのか戸惑いの表情を見せた。

だが、すぐにぺこりとお辞儀^{じぎ}をする。

「今年度エルディア王国より転入してきました。ルイス・シュバリエです」

「同じく、アラン・ドレイユと申します」

彼らの自己紹介に、シエナ先生は「へえ」と声を漏^もらす。

「見慣れない顔だと思ったら、三年から入った転入生か。エルディア王国は、私も鉱石研究で訪れたことがある。シュバリエということは、エルディア王家に連^つなる者なのか？」

姓^{せい}でルイスが王族であると感じても、シエナ先生はまったく動じないな。

まあ、ステア王家の方々相手でも、態度を変えない人だもんね。

しかし、アランはその言動が不敬だと感じたらしい。

不愉快^{ふげつ}そうに顔を歪^{ゆが}め、意見しようと席を立つ。

「シエナ先生、その聞き方は少し失礼では……」

しかし、ルイスはそんなアランの腕を引き、再度着席させた。

「やめろ、アラン。このステア王立学校において、俺はただの学生だ。彼女が誰に対してもこのような接し方なら、俺だけ特別扱いされるわけにはいかない」

へえ、ルイスはアランみたいに、不機嫌にならないんだな。

ステア王立学校には、学問を学ぶのに身分は関係ないという理念がある。

学校内では王族も貴族も商人も平民も、平等に学ぶ権利があるという考えだ。とはいえ、王族や貴族の子が、すぐにその理念に沿_そえるわけではない。

生まれてからずっと、下の者に敬_{うやま}われる環境にいたわけだからね。

頭では理解できても、順応するには時間がかかったりするんだ。

実際に家の身分が高いことを理由に下の者を従わせようとして、罰_{ばつ}を受けた生徒がいるという話も聞いたことがある。

ルイスは転入してきたばかりだし、王族としての誇_{ほこ}りが強そうに見えるから、シエナ先生の言動を不愉快_{ふゆかい}に感じるかもと思ったのだが……。

意外にも、適応力があるみたい。

「俺はエルディア王国の第四王子です。従者であるアランが、失礼しました」

ルイスがシエナ先生に向かって軽く頭を下げると、アランも慌てて「すみませんでした」と頭を下げる。

「いや、お互い様だ。受講理由を確認したくて、少し不躰_{ふしつ}に聞きすぎたかもしれないからな」

そう話すシエナ先生に、ルイスは首を傾げる。

「……受講理由の確認ですか？」

聞き返されて、シエナ先生は小さく肩をすくめた。

「エルディア王国はグラント大陸の中でも、鉱石の産出量が多い国だろう？ だから、それが受講理由じゃないかと思ったんだ。私から最新の鉱石学を学び、自国で産出される鉱石を有効利用しようと考えているのではないかと思ってな」

ルイスとアランは、それを聞いて目を瞬_{しん}かせる。

「うちの国は、鉱石の産出量が多いんですか？」

「……知りませんでした」

俺たちは授業で産出量の多い地域を習ったことがあるから知っていたが、二人は知らなかったらしい。

驚く二人に、シエナ先生は意外そうな顔をする。

「知らなかったのか？ その様子だと、鉱石学に興味があるわけでもなさそうだな」

言い当てられたルイスは、少し躊躇_{ためら}いつつ答える。

「えっと……はい。鉱石に興味はありません」

それを聞いて、レイは動揺する。

「しょ、正直すぎる。俺ならシエナ先生に向かって、そんなこと絶対に言えないぜ」
うん。その学問を研究している教師に対して、興味がないなんて言えないよねえ。
しかも、受講までしているのに。

王族は本音を隠すのがうまい人が多いけれど、ルイスは誤魔化せない性格なんだろうか。それとも、正々堂々を心がけているとか？

ライバル宣言をしたり、選択科目を聞きに来たりと、俺に直接言ってきたもんね。俺個人としては、正直な人は好感が持てるけど……。

シエナ先生はどう感じただろうか。

俺たちがシエナ先生を見上げると、彼女はフンと鼻を鳴らした。

「別に、これくらいで不機嫌になったりはしないさ。世間的には鉱石の地位はまだ低いからな」
そうなんだよねえ。

鉱石は火をつけることができたり、水を出したりできる便利なものだ。

ただ、普通に使うと威力は弱く、発動時間が一分にも満たないくらい短い。

それゆえ、鉱石は属性の力を持つ召喚獣より使えないと言われている。

最近、鉱石の持続時間を延ばす『エナの液体』が開発され、少しずつ使い方が見直されてきているんだけどね。

エナの液体が流通すれば、もっと価値が上がるんだろうけど、こちらはまだ研究途中で市場に出回っていないからなあ。

鉱石の地位が向上するのは、まだまだ先になりそう。

シエナ先生は腕組みをして、ルイスに向かって聞く。

「鉱石が素晴らしいものであると、まだ気がついていないのはわかった。では、どうして受講を決めたんだ？ 私が言うのもなんだが、鉱石学は単位が取りにくい授業だぞ？」

その問いに、ルイスはカイルを隔てた二つ隣の席にいる俺をちらつと見た。

「この学年における、総合成績の最優秀者であるフィル・テイラとの勝負に勝つためです。そのために、同じ科目を受講しました」

そこも正直に話しちゃうの！？

シエナ先生はゆっくりと視線を、ルイスから俺に移す。

「フィルに勝つため……だと？」

片眉を上げる彼女に、俺は首をブルブルと細かく横に振った。

「ぼ、僕は彼と勝負するつもりはありませんからね！ 純粹に鉱石学を学びたい気持ちで、今年も受講を決めたんですから」

強く否定した俺に、カイルも加勢する。

「フィル様は一方的に、ライバル宣言されているんですよ」

「ほお、一方的にねえ。お前は本当に面倒事に巻き込まれるなあ」
しみじみと言われ、俺は項垂れる。

それは俺も思っていることだから、言わないでほしい。

シエナ先生はフツと鼻で笑ったあと、ルイスたちに視線を戻した。

「ルイスの動機はわかった。……アランも動機は一緒か？」

「いえ、俺はルイス様の従者として、同じ科目を選んだだけです」

シエナ先生は顎を撫でて、「なるほどねえ」と呟く。

ルイスは少し不安そうに、彼女を見上げる。

「受講を取り消しにしますか？　しかし、不純な動機と思われるかもしれませんが、俺はいたって真剣なんです」

「別にお前の動機がなんであろうと、私は構わない。私の授業を邪魔するつもりで、受講する気はないんだろう？」

その問いに、ルイスとアランは鼻息荒く答える。

「それはもちろん！　邪魔をした状態で勝っても、仕方がありませんから。真剣に学びます！」

「俺もルイス様の意思を尊重しますし、真面目に受講します」

二人の言葉を聞いて、俺はちよつと安心する。

授業をちゃんと受けられるかが、心配の種だったからね。

俺が安堵していると、カイルとレイが囁いてくる。

「まだ安心するのは早いですよ」

「そうぞ。□ではどうとでも言えるんだから」

早かったかな？

「でも、授業で邪魔なんてしたら、自分の評価にも関わってくるだろうし……」

単位を落とすどころか、下手したら処罰対象になりそうなことほしくないと思うんだけど。

すると、俺たちの会話が聞こえたのか、ルイスが眉を寄せる。

「シユバリエの名にかけて、約束を違えることはしない。正々堂々とお前に勝つ！」

そんな彼に向かって、シエナ先生はフツと笑う。

「フィルは強敵だぞ？　鉱石学の成績は、レポートの内容を重視している。フィルが書くレポートは、斬新な内容が多い。その発想力は、そこらの研究者より数段上だと思っている」

えー！　シエナ先生、俺をそんな風に評価してくれていたのか。

滅多に褒める人じゃないから、嬉しいな。

シエナ先生の言うように、ルイスはかなり不利なんだよね。

鉱石学ではテストもあるにはあるが、評価の配点はレポートのほうが高い。

鉱石の知識を記憶すれば、いい成績をもらえるというわけではないのである。

しかも、シエナ先生が出すテーマは、『鉱石の活用法』とか『二種類の鉱石を組み合わせた発動

の考案』などで、俺にとって得意なテーマが多い。

俺は常に「鉱石を使つて、便利に生活できないかなあ」って考えているからね。

ルイスがいかにも優秀な子だとしても、興味の無い分野で同様に考えられるのかな。

シエナ先生はじつとルイスを見つめる。

「それでも、勝つと言うのか？」

ルイスはその目を見返し、コクリと頷いた。

「俺はエルディア王国で常にトップでした。ここでも、トップを目指します」

途端に、シエナ先生のクールビューティーな相貌が崩れた。

ニヤアツと笑う彼女を見て、俺たちは固まる。

な、何？ その、面白いものを見つけたみたいな表情！

怖いんですけど！

レイも俺と同様に思つたらしい。

「シ、シエナ先生……何かよからぬことを企んでいらつしやったりしています？」

レイが変な敬語で怖々聞くと、彼女は真顔になる。

「よからぬこと？ 何も企んでなどいない。向上心のある生徒のため、たまには教師らしいことをしようと思つていただけだ」

そう返すと、シエナ先生はルイスの顔を真つ直ぐ見つめる。

「フィルに勝つつもりなら、当然補講は受けるんだよな？」

「はい。その予定です！」

元氣な返事に、シエナ先生はにっこりと笑みを浮かべた。

「では、特別な補講を受けさせてやろう」

ルイスとアランは目を瞬かせる。

「特別な補講……ですか？」

「それは通常受ける補講とは違ふつてことですよね？」

シエナ先生はコクリと頷く。

「授業についていくための補講では、フィルに勝つことなど到底できないだろう。鉱石というものがどういふものか、鉱石がいかにも素晴らしいか、一から丁寧に教えてやる」

ルイスたちは表情を和らげた。

「ありがとうございますー」

感謝を受けて、シエナ先生は満足そうだ。

俺と友人たちは、顔を寄せ合つてヒソヒソと話す。

「ルイスたちは感謝しているけど……。どう思う？」

俺の問いに、レイは考え込みながら答える。

「うーん、美しいシエナ先生との補講は、俺だったら嬉しい。けど、特別っていうのは怖いよなあ」

「シエナ先生の授業は、普通でさえ大変なものねえ」

ライラの言葉に、全員が大きく頷く。

俺たちは二年間鉱石学を受講してきたから、シエナ先生が生徒に求めるレベルがとても高いことを知っている。

そんなシエナ先生が行う特別補講だ。

「ちよつと心配だなあ」

俺はポツリと呟いた。

3

ステア王立学校中等部には、剣術クラブのような正統派から、珍味クラブという一風変わったものまで、多種多様なクラブが何十個も存在する。

学生はこの中の何かしらのクラブに所属しなくてはならない。

もし、この中から入りたいものが見つからなければ、自分で立ち上げてもいい。

顧問の先生と数人の部員を用意し、活動内容が明確であれば、申請後に認可が受けられる。

俺の所属している『モフモフ・鉱石研究クラブ』も、一昨年創設したばかりのクラブだ。

卒業したデュラント先輩と俺の二人で立ち上げ、今の部員は、俺とカイルとレイとトーマとライラとアリスの六人だけ。

クラブ顧問は、シエナ先生だ。

活動内容は召喚獣との触れ合いや、鉱石の研究と実験など。

鉱石研究はシエナ先生がいる時に限定されるため、ほとんどがモフモフ活動だ。

今日はシエナ先生が久々に参加するということで、鉱石研究の日に決定した。

鉱石研究の活動時は、授業でも使っている鉱石学教務担当室でやる。

俺たちはそこへ向かいながら、モフ研の今後について話していた。

「後輩が入部してくれないと、今年はさすがに困るよね」

俺がそう言うと、アリスは困り顔で頷く。

「ええ、後輩がいないと廃部になっちゃうわよね」

俺たちも、もう三年生。中等部を卒業してしまったら、部員が誰もいなくなる。

つまり、クラブを継いでくれる後輩がいなければ、自動的に廃部になってしまうのだ。

「今年は誰か入部してくれるかなあ？」

トーマの問いに、俺は「うーむ」と唸^{うな}った。

どうだろう。去年も入部希望者がいなかったんだよね。

動物をモフモフできるし、鉱石の探究心も満たせるし、いいクラブなのになあ。

鉱石学自体にあまり人気がないからか、それとも顧問がシエナ先生だからなのか。

シエナ先生はストリートな物言いをするし、『鉱石学は授業が難しく、容赦^{ようしや}なく単位を落とす』という噂のせいで、生徒たちから怖がられているんだよね。

教務担当室に籠^こもっていて滅多に会えないところも、噂を助長させている一因だろう。

率直な言動は裏表がないってことだし、鉱石の研究をしている姿はカッコいいんだけどな。

ちゃんとお話しすれば、シエナ先生の印象も変わるのに。

俺は深いため息を吐く。

「少人数でのんびりクラブ活動できるから、今の環境は最高だよ。でも、デュラント先輩のために、廃部は避^さけたいなあ」

モフ研の前身は、デュラント先輩が創設した鉱石研究クラブである。

俺たちがステア王立学校に入学した当初、鉱石研究クラブは三年生が卒業していなくなったことで部員が減り、廃部寸前だった。

廃部を避けるために、デュラント先輩は俺と手を組み、『召喚獣^いをモフモフして癒^いやしを追求したい』という俺の要望を組み込む形でクラブを残したんだよね。

それなのに、デュラント先輩が卒業してから一年で廃部となってしまったのでは、合わせる顔がない。

「うーん、一、二年生で新入部員が誰か入ってくればなあ」

俺の呟きに、ライラは苦笑した。

「クラブを立ち上げた時は、フィル君やカイル君のファンたちが押し寄せるんじゃないかって言っていたのに。まさか、こんなにも部員が入ってこないとは思わなかったわよね」

確かに、最初はそんな心配をしていたっけ。

レイは小さく肩をすくめる。

「フィルとカイルのファンクラブには鉄の掟^{おきて}があるから、それでモフ研に入部できないんだろ」

俺やカイルには、いくつかファンクラブがある。

そこでは、それぞれ会員規則なるものがあるのだという。

ファンクラブごとに内容や文言は少しずつ違うみたいだが、共通した規則が一つある。

それは、俺やカイルに『個人的かつ不必要な接触を強要しない』というもの。

クラスメイトや先輩・後輩として接し、その過程で仲良くなること自体は問題ない。

ただ、強引な接触を試みて、俺たちを困らせてはいけないというものらしい。

この規則の存在は、去年初めて知ったんだよね。

ファンクラブのメンバーは接触を我慢して、代わりに俺の授業やクラブ活動の様子を観察……いや、遠くから見守っているんだって。

各ファンクラブが見守る時間帯や人数は、カイルが決めてスケジュールを組んでいるそうだ。

屋外でやる剣術などの授業の時とか、クラブ活動で動物と戯れている時とか、行事の時とか。

決められた時間帯はいいけど、それ以外での見守り行為は絶対に禁止。

だから、プライベートタイムは、一応守られていると言える。

正直、見られていると思うとちよつと落ち着かないけどね。

見守る人たちは隠れるのが上手なのかあんまり気にならないし、授業やクラブ活動を見学されているようなものだと思うようにしている。

とにかく、ファンクラブの人たちの中では、モフ研に入部するのは、その規約に反するものとされているらしい。

「規約さえなかったら、入りたい人もいっぱいいるんだろうにねえ」

のほほんと話すトーマの言葉を聞いて、俺は考え込む。

今は廃部の危機だ。もしファンクラブの人たちの中に、動物と鉱石が好きで、シエナ先生が怖く

ないと思っっている生徒がいるなら、何人か入れてもいいんじゃないだろうか。

そんなことを考えていると、レイが俺の肩をポンと叩いた。

「ファンクラブから、特別に何人か入部させようと思うなよ？」

考えを当てられて、俺は目を見開く。

「すごい。なんでわかったの？ 各ファンクラブの会長と相談して、お願いできないかなって……」すると、盛大なため息を吐かれた。

「絶対に、ダメだ。たとえフィルと会長が話をつけても、カイルが許可を出したとしても、直々に例外を作ったらファンクラブ内部で軋轢が生まれる。ファンクラブ同士の争いを見たくないなら、絶対にやめろ」

レイはよく冗談を言うが、今の顔つきを見れば真剣に言っているのがわかる。

これは本当にダメな時の忠告だ。

ライラもレイの意見に賛同する。

「私もやめておいたほうがいいと思うわ。今は全員が同じ立場だから、平和なの。特例を作れば、均衡が崩れるわ。だからといって、ファンクラブ全員を入れることは人数的にできないしね」

確かに、全員に参加を希望されたら難しい。

「わかった。諦めるよ。……ちなみに、ファンクラブ会員って各クラブを合わせると全部で何人く

「らいいいの？」

「以前、F・Tファンクラブのお茶会に誘われた時、その場には二十人くらい集まっていた気がする。」

他にも『フィル・テイラを見守る会』、『フィル君を弟にし隊』、『フィル・テイラ料理愛好会』などのファンクラブがあることは俺も把握している。

これらを合わせるとどのくらいになるんだろう。好奇心で聞いた俺の質問に、カイルは考え込む。

「それは……フィル教を含めない、中等部の生徒の人数ですか？」

フィル教というのは、俺を料理の神様として崇めている集団のことである。

こちらはステア王立学校敷地内のカフェ『森の花園』の料理人をしているボルカ・イングさんが、主だつて動いており、彼女の声がけなどにより着々と信者を増やしているらしい。

すでに立派な俺の祭壇までできているんだよね。

止めようにも、信者が多くなつてしまつて收拾がつかない状態になっている。

……神様が止められない信者たちつてなんだろ。

ともあれ、フィル教を含めるとさすがに規模が大きくなりそうだな。

「うん。含めない、今も中等部に在籍している子たちだけの人数を教えて」

カイルは考え込んだ姿勢のまま、自信なさげに口を開く。

「新一年生の会員数は把握できていないので、今の中等部二、三年生だけの人数になりますが……。」

フィル様のファンクラブ会員は、合計で百三十二名です」

ひやく、さんじゅう、に？

言われた数字を頭の中で反芻し、聞き間違えを疑った。

「い……今、百三十二つて言った？」

「はい。三年生に上がったタイミングで数え直したので、その数字で間違いありません」

俺は一呼吸置いて、叫ぶ。

「ええ!? そんなにいろの!？」

だが、驚いたのは俺だけで、友人たちは平然としていた。

「へえ、二、三年生だけだと、そのくらいなのか」

「僕、もう少し多いと思つてた」

むしろ、レイとトーマは少ないとさえ感じているようだ。

その感覚の違いにも驚かされる。

「少ないの？ この学校つて一学年あたりの生徒数が、百人くらいなんだよ？ 二学年合わせた人数が二百人だとして、その過半数が加入しているってことになるじゃん」

困惑する俺に、ライラはクスクスと笑う。

「フィル君は自分が人気者だっという自覚が足りないわよね。その数でも少ないほうなのよ。ファンであっても、全員がファンクラブに入れるわけじゃないから。ね、アリス、カイル君？」

同意を求められた二人は、揃って頷いた。

「ええ、それぞれのファンクラブには、ファンクラブ入会テストがあるのよ」

「規則を破れば、辞めさせられることもある」

それを聞いて、レイは思い出した顔で「ああ」と声を漏らす。

「鉄の掟かあ」

……や、破った人がいたのだろうか。

ファンクラブの掟の厳しさを感じる。

それでも残っている精鋭が、百三十二人もいるんだな。

掟をきっちり守っている人たちの中から特例を出したら、確かに他の人は面白くないよね。

「提案する前に知れて良かった。危うく、クラブ内に波風を立てるところだった」

俺が息を吐いていると、アリスもホッとした顔で微笑む。

「フィルが思いとどまってくれて嬉しいわ。フィルのファンクラブ会員は、フィル教の方々はもちろん、初等部や高等部、教師や学校内施設職員もいるもの。百三十二人の中から選んでしまったら、

きつと『中等部の生徒だけずるい』って言う人が出てくるわ」

「先生や施設職員までいるの!？」

冗談かと思ったが、カイルはややげんなりとした顔で補足する。

「フィル様、先ほどライラも言っていましたけど、もう少し人気者である自覚を持ってください」

だって、俺のことを応援してくれる人がいるのはわかっていただけ、そこまでだと思わなかったんだよね。

数字が大きすぎて、理解が追いつかないし。

本当の本当にそんなにいるの？　って、疑いの気持ちが勝ってしまうんだよね。

「じ、自覚かあ……」

俺が「うーん」と悩んでいたら、アリスは再び微笑んだ。

「ふふふ、私はそのままのフィルでもいいと思うけどね」

「フィルらしいけど、もったいないよなあ。もしも俺がフィルなら、ファンに囲まれて人気者生活を満喫しているだろうに」

レイはそう言っ、口元を緩ませる。

もしもの世界を想像しているのだろうか。

ライラはにまにましているレイの頬を軽くつねった。

「くだらない想像してるんじゃないわよ。フィル君は謙虚^{けんきよ}なの。ファンに囲まれた生活を謳歌^{おうか}するようなタイプじゃないから、人気者なのよ」

レイは頬をさすりながら、「むう」と唇^{くちびる}をとがらせた。

俺はそんなやりとりで笑って、話題を元に戻す。

「まあ、僕の自覚の有無については横に置いておくとして……。モフ研の新入部員はどうしたらいいだろう」

トーマが困り顔で首を傾げる。

「フィルのファンだけじゃなくて、カイルのファンも入れないだろうしねえ。そうすると、二年生から連れてくるのは難しそう」

そうだよ。俺のファンクラブだけでなく、カイルのファンクラブも条件は同じ。

去年モフ研に入ってくれる後輩がいなかったのも、それが関係しているのかな。

「となると、まだファンクラブに入っていない一年生を勧誘^{かんゆう}する？」

俺が提案すると、カイルが言いづらそうに口を開く。

「あの……先ほど一年生の会員数は把握できていないと言いましたが……。初等部の時点で、ファンクラブに加入している生徒が複数いました。そのまま中等部に進学した彼らの人数が、結構な数になっていたような……」

俺は悲しい目で、カイルを見上げる。

「も……もう詰^つみじゃん！」

このままだと廃部一直線だあああ！

絶望して頭を抱えた俺を、アリスが優しい声^{なぐさ}で慰める。

「でも、ファンクラブに入っていない子は必ずいるし、外部入学してきた生徒もいるわ。私がメルティに事情を話して、会員じゃない一年生のこと聞いてみるから。きっと協力してくれるわ」

メルティとは、同級生のメルティ・クロスのこと。

彼女はF・Tファンクラブの会長で、俺の各ファンクラブの会長とも交流している。

モフ研のことで彼女の手を煩わせるのは申し訳ないが、情報をもらえたらとても助かる。

新入部員が入るか入らないかで、モフ研の未来が変わってくるのだから。

「じゃあ、明日お願いしてみようか」

俺の言葉に、皆は賛成してくれた。

ようやく話がまとまった頃、ちょうど鉱石学教務担当室の扉の前に到着した。

俺はいつものように、扉をノックする。

「シエナ先生、クラブ活動で来ました」

すると、シエナ先生の返事より早く内側から扉が開かれた。

え！ 先に開けてくれるなんて、初めてじゃないか？

驚いていると、扉の先にいたのはシエナ先生ではなく、エドとヴァンだった。

「フィル師匠！ お待ちしていました！」

「どうぞ、中へお入りください」

部屋の中へ誘う二人に、俺たちは目を瞬かせる。

「え？ どうして——」

二人が何故ここにいるのかと問いかけて、そういえば二人も鉱石学を受講することにしたのだと思いつく。

「あ、もしかして一年生の授業が終わったばかりなの？」

部屋に入りながら俺が聞くと、エドはニコニコと笑いながら答える。

「はい。先ほどまで鉱石学の授業がありました。しかし、今僕たちがここにいるのは、モフモフ・鉱石研究クラブのクラブ活動に参加するためです！」

そう言つて、腰に手を当てて得意げに胸を反らせる。

モフ研に……参加？

どういった意味での参加だろうか、俺は首を傾げる。

「えっと、つまり、モフ研の見学に来てくれたってこと？」

確認すると、二人は揃つて首を横に振った。

「「いえ、入部希望です！」」

「え！ 入部!？」

入学してまだ間もないのに、もううちに入るって決めてくれたわけ？

生徒は必ずどこかのクラブに所属する規則になっているが、一年生はまず中等部の生活に慣れることが優先される。

クラブの数も多いから、いろいろ見学して回るのも時間がかかるしね。

だから、『入学してから二、三ヶ月以内には入ること』と、決定までの期間には余裕を持たせていた。

俺たちも一年生の時、かなり期限ギリギリで所属クラブを決めたんだよねえ。

二人が入部してくれるのは、とてもありがたい。

決めたというなら、学校が設定する締め切りを待たず入部することは可能だけど……。

「他にもいろいろ見学しなくて大丈夫？」

心配を口にした俺に、アリスも続く。

「クラブはいくつも兼部ができるけど、活動日数が多かったり、活動日がかぶるようなクラブだと

続けていくのは大変よ？」

活動する曜日や、月の活動日数は、クラブによってまちまち。

毎日活動しているところもあれば、週に数回や月に数回といったところもある。

トーマは動物研究会と兼部しているが、そちらは月に一回。

カイルは剣術クラブと一緒に鍛錬^{たんれん}することがあるが、正式に所属しているわけではないので時々参加する程度。

ちなみにモフ研は週に一回程度の活動で、活動日は皆のスケジュールを聞いてから決めている。

毎日活動しないからこそ、活動日はなるべく全員集まりたいからね。

部員が「その日は用事がある」と言えば、活動日をずらすこともある。

ただ、必ず日にちを調整できるとは限らないので、あとは本人に任せるしかない。

ライラはエドたちの顔を見つめ、真剣に尋ねる。

「二人ともうちのクラブの活動内容を知っていて、入部希望を出しているのよね？」

「選択授業を聞きに来た時みたいに、フィルを敬愛しているからって理由でうちに入ろうとしているんじゃないのか？ そうだとしたら、認めるわけにはいかないぞ？」

レイは腕組みをして、彼らの本気を確かめるかのように睨む。

確かに、廃部の危機とはいっても、そういう理由なら受け入れるわけにはいかないよなあ。

すると、エドとヴァンは慌てて否定した。

「ち、違います！ フィル師匠のことは尊敬していますが、ここに入りたいと思ったのは、面白そうだからです！」

「ええ、そうです。エド様も俺も、鉱石学を受講して鉱石に興味が出てきたんです」

それを聞いて、俺は思わず食いつく。

「え！ 鉱石に興味が？」

それは、嬉しい。

鉱石のよさを知ってもらいたくて、周りの友人たちにすすめたりするのだが、話は聞いてくれても大抵はそれで終わっちゃうんだよね。

「鉱石のこと面白いつて思ってくれたの？」

前のめりで聞くと、エドはニコニコしながら頷く。

「はい。鉱石にはいろんな属性のものがあるんですね。使い方によって効果も様々で、フィル師匠が鉱石学を学ばれる気持ちがありました」

そんなことを言ってもらえるとは……。

胸がジーンとする。

ルイスやアランのように、エドやヴァンも最初から鉱石学に興味があつて授業を選択したわけ

じゃない。

だから、授業が嫌になってしまったらどうしようと思っていたんだよね。

俺きっかけで鉱石に興味を持ってくれたなら、こんなに幸せなことはない。

「モフモフ・鉱石研究クラブでは、新しく入手した鉱石の実験などをやるとシエナ先生から聞きました。それで、クラブに入部しようと思っただけです」

「『鉱石に興味があるならモフ研に入るか？』って、シエナ先生がおっしゃってくれたんですよ」

エドとヴァンの話を聞いて、俺たちは「え！」と奥の席に座るシエナ先生に視線を向けた。

「シエナ先生、モフ研をおすすめしてくれたんですか？」

まさか、シエナ先生自ら生徒を勧誘してくれるなんて。

驚嘆していると、シエナ先生は読んでいたレポートから顔を上げた。

眉根を寄せ、ぶっきらぼうな口調で告げる。

「別におすすめるなどしていない。興味があるようだったから、活動内容を説明して入部の意思を確かめただけだ」

突き放した言い方が、照れ隠しのようにも聞こえる。

本心はわからないが、俺たちとしては助かった。

「フィル師匠、入部を認めてくださいますか？」

「純粹な気持ちで、クラブに入りたいと思っただけです」

レイが理由によつては認めないと言ったので、エドもヴァンも不安になったのだろう。

二人はじつと俺を見つめて、答えを待つ。

デュラント先輩が卒業した今、モフ研の部長は俺だ。

理由を聞いた限り、入部を許可しても大丈夫だと思いが……。

皆はどう思っているだろう。

俺が友人たちに顔を向けると、初めにカイルが口を開いた。

「フィル様を目的としているのじゃないのなら、状況も状況ですし入部させてもいいと思います」

カイルの言葉に、アリスとトーマとライラも笑顔で頷いた。

「私も歓迎するわ」

「僕もー！」

「私もいいと思う」

話がまとまりかけたように見えたが、レイが「ちよつと待て」とストップをかけた。

「俺も賛成ではあるんだけど、念のために聞かせてくれ。エドたちはフィルやカイルのファンクラブに入っていないかな？」

あ、そうだよ。彼らがすでにファンクラブに入っていたら、鉄の掟に引っかかる。